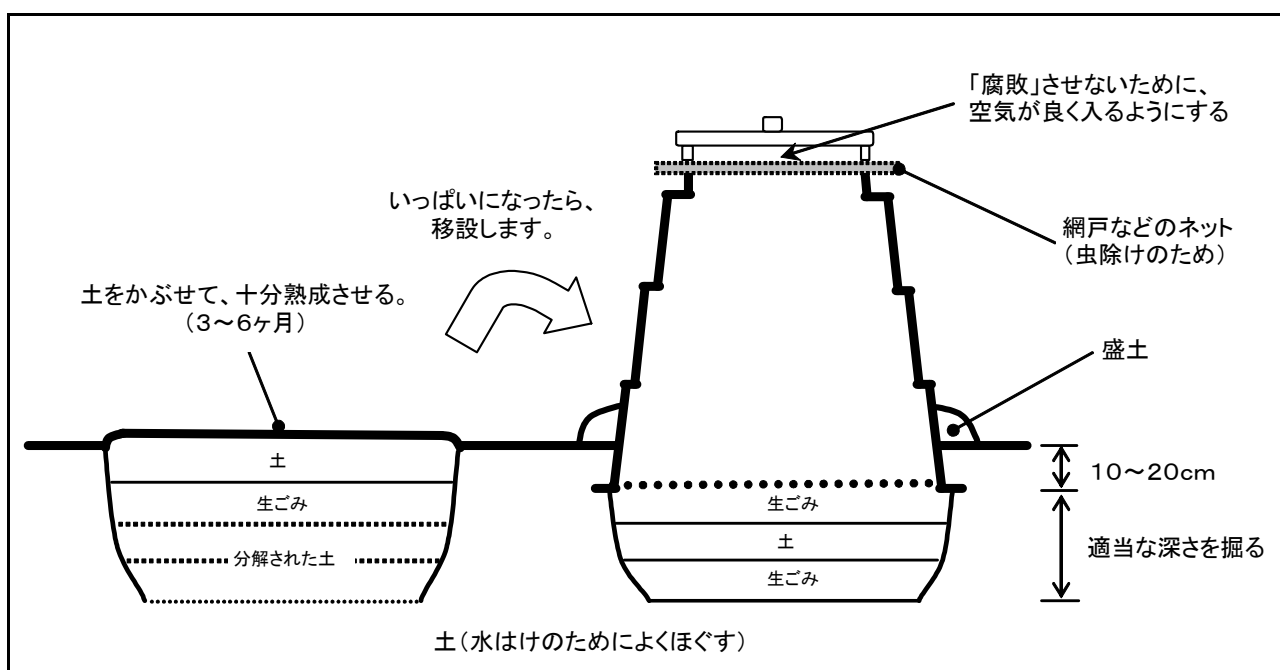
生ごみ処理容器の上手な使い方

生ごみ処理容器とは、生ごみや枯葉などから、土中の微生物の働きを利用し、堆肥作りをする容器です。市では、ごみの減量化の一環として、生ごみ処理容器の購入費の一部を助成しています。

１．使い方

地上式の生ごみ処理容器の場合、適当な深さの穴を掘り、容器を１０～２０cm 程度埋設します。生ごみや土などを投入し、堆肥作りをします。設置が簡単で、生ごみがいっぱいになった時の移設も、簡単に行えます。

地下式の生ごみ処理容器は、容器全体を地中に埋設します。容器は地中に隠されるので、庭の美観を損ねません。また、生ごみと土の接触面積が比較的大きく、地温によって温度が一定に保たれるので、冬場でも比較的良い条件で堆肥化できます。

上手な使い方の例（地上式生ごみ処理容器）

２．上手な堆肥づくりのポイント

① 新鮮な食物

生ごみは新鮮なうちに入れましょう。新鮮な食物は「分解」されやすく、堆肥も良質なものになります。腐った食物を入れると「腐敗」し、良質な堆肥ができないだけでなく、悪臭や虫が発生する原因になります。また、貝殻やプラスチックなど、分解されないものを混入しないようにしましょう。

② 適当な温度

生ごみ処理容器は、なるべく**温かい場所に設置**するとよいでしょう。温度が高くなると、微生物は活発に活動します。しかし、高い気温が続く夏場は、微生物の呼吸によって空気が不足しやすくなるので、時々土を細かに耕し（切返し）て、堆肥の内部まで空気を入れましょう。

＜裏面につづく＞

③ **水分と空気のバランス**

上手な堆肥づくりには、水分と空気のバランスが大切です。水分と空気は、多すぎても少なすぎてもうまくいきません。

水分は、材料の５５～６０％（材料を強く握りしめたとき、手に水気を感じ、わずかに水が出る程度）が適当です。生ごみは、水分が約８０％以上を占めるため、投入前には**水をよく切る**ことが必要です。

生ごみ処理容器のふたを閉めると、虫の浸入や臭いの拡散を防ぐことができますが、空気が不足し「腐敗」しやすくなります。上手に「分解」させるためには、空気がよく入るように、ふたと本体との間に隙間を開けておくと良いでしょう。その際、虫除けのために、容器の口を網戸などのネットで覆ってください。ふたと本体との隙間から臭いが外に出るため注意が必要ですが、密閉して腐敗した時の臭いに比べ、臭いは弱くなります。

３．臭いと虫の防止法

臭いや虫は完全に取り除くことはできませんが、軽減させることはできます。最も重要なことは、「腐敗」させないことです。また、土は水分や臭いを吸収します。臭いや虫が気になるときは、土を多めに入れると良いでしょう。生ごみを入れるごとに、生ごみと同量～２倍程度の、**十分に乾いた土**を層状（サンドイッチ状）に入れます。

４．発酵を促進させるために

気温の上がらない冬場は夏場に比べて、発酵・分解に時間がかかります。このような場合は市販の発酵促進剤を使用すると良いでしょう。米ぬかを振りかけても、発酵促進に効果があります。

また、腐りかかった落ち葉を混ぜると、落ち葉に付いている微生物が堆肥の中で増え、発酵・分解が促進されます。落ち葉は過剰水分の吸着にも効果があります。

５．堆肥は十分熟成させましょう

熟成が不十分な堆肥を使用すると、植物に悪影響を及ぼします。堆肥は１ヶ月に２～３回切返しを行い、十分に（３～６ヶ月）熟成させてから使用して下さい。

6．堆肥の上手な使い方

堆肥をプランターで使用する場合には、土に対して堆肥を２～３割混ぜて使うと良いでしょう。家庭菜園の場合には、堆肥をまき、よく耕してから使用してください。

☆生ごみを堆肥にして、減量することはとても大切なことですが、**もっとも大切なことは、生ごみをなるべく作らないこと**です。食材は、買いすぎない、作りすぎない、使い切るようにこころがけましょう。

＜注＞皆様からのご意見や文献を参考に作成しております。併せて、商品の取扱説明書も御覧になり、使用して下さい。

茅ヶ崎市　環境部資源循環課
〒253-8686 茅ヶ崎市茅ヶ崎一丁目１番１号
電話番号　0467-82-1111 (内線)3531～3533

（※有機物の分解には、酸素のある条件下で好気性微生物が行う「酸化分解」と、酸素のない条件下で嫌気性微生物が行う「発酵分解」があります。発酵分解は、微生物により「有用発酵」と「腐敗（有害発酵)」に分けられます。）